第2回 青山俳壇 受賞作品発表

題字　嵯田宣彌理事長

第2回青山俳壇の受賞作品が次のとおり決定いたしました。受賞者の皆様、おめでとうございます。幼稚園児から大学院生、校友、教職員、保護者、学院関係者など総勢1491名の方々よりご応募いただきました。たくさんのご応募、誠にありがとうございました。

テーマ「スポーツ」

最優秀賞

夏の空はじめてうったホームラン

初等部3年■小林 蒼大

ぼくは、野球を習っています。この夏にはじめてホームランをうちました。そうしたら高学年が練習する方までボールがとんでいきました。その時うれしくてゆめかと思いました。ホームベースをふんだ後、うれしなきをしました。その時のことを俳句にしました。

選者　片山 由美子

はじめて打ったホームランがぐんぐんのびていったのでしょう。そのいきおいとうれしさが「夏の空」という季語から伝わってきます。夏空の青さと白いボールが印象的です。

遠泳の光り輝く青い海

初等部6年■堀越 麗禾

初等部の五年生は、毎年長崎県平戸へ遠泳をしに行きます。けれども私は昨年の夏に、平戸へ行くことができませんでした。それでもみんなが平戸の海を泳いでいる様子、そして、泳ぎ終わった後に特別綺麗に見えるだろう海を想像してこの俳句を書きました。

選者　大屋 多詠子

お友達の様子を思い浮かべて詠みました。陽光が燦々と降り注ぐ海を遠くまで泳いだ同級生。さぞ気持ちが良かったことでしょう。その達成感と陽に照り輝く海の美しさを想像して、綺麗にまとめています。

寒稽古冷気まで斬る竹刀かな

中等部1年■竹ノ脇 珠葉

この度はこのような賞をありがとうございます。受賞が決まった時はとても嬉しかったです。私の家の近くには剣道教室があり、いつもその前を通ると通っている生徒さん達のかけ声が聞こえてきます。寒い日も練習していてすごいなと思った時のことを詠みました。

選者　林 謙二

「寒中」の剣道場、冷たい板の間に素足は痛い。そんな寒さまでも一刀両断するほど鋭く振り下ろした竹刀。張りつめた空気、懸命に練習する姿からうっすら上がる湯気さえ見えてきます。

麦の風運ぶオールも傷だらけ

中等部3年■城野 桜子

この俳句は6月の上旬に家族でレンタルしたカヌーのオールを見て詠んだものです。多くの人に使われてついた傷が湖上のさわやかな風によりいじらしく朗らかに見えて印象的だったので詠みました。受賞には驚きましたが、光栄です。

選者　櫂 未知子

ボート関係の部活動なのでしょうか、さんざん使っている櫂は「傷だらけ」です。しかし、季語の明るさもあって、その傷が誇らしく見えてくるような素敵な作品でした。

薫風の四万十越えるジップライン

初等部保護者■石渡 綾香

この夏初めて、夫と初等部2年生の息子が四国を2人旅し、四万十川のジップラインを体験しました。帰宅した2人の話から、壮大な自然の中、美しい川を颯爽と飛び越える情景と心の躍動が鮮明に浮かび、俳句にしました。私も一緒にジップラインしたかったなぁ。

選者　櫂 未知子

冒険心をよびおこしてくれる点で「ジップライン」もスポーツと呼べるかもしれません。雄大な自然を存分に楽しんでいる作者の表情が感じられ、すばらしいと思いました。

理事長賞

白息（しらいき）のたすき天下の峻までも

校友 ■ 金子 文衛

選者 堀田 宣彌

冬の箱根の山は寒いです。吐く息は口から出て四十センチは白くなります。毎年行われる箱根駅伝。次回は第百回の記念大会です。我が青山学院大学は優勝が宿命です。校友のひとりとして選手諸君への力強い応援の気持ちが汲み取れます。

院長賞

先輩のアタック受けて夏終わる

中等部1年 ■ 大隅 歩

選者 山本 与志春

先輩が打つアタックを必死にレシーブするうちに成長した作者。そして、先輩との関係も変わったのでしょう。人間関係や自身の変化を、季節の終わりの寂寥（せきりょう）に伴って表現した秀作です。

初等部長賞

おひさまとおよいだあとのかきごおり

初等部1年 ■ 武田 優奈

選者 小野 裕司

夏休み、学校で仕事をしていると、水泳を終えた子たちが声を弾ませて通りました。かき氷があったら喜ぶだろうな、と思いながら見ていました。嬉しいね、優奈さん。泳いだ後のかき氷は最高だよね。

徒競走せなかおしてる秋の風

初等部4年 ■ 谷口 森雅

選者 小野 裕司

子どもの頃、徒競走が苦手でした。いつも4等か5等。風が背中を押してくれないかな、と運動会のたびに願っていました。やったね、森雅さん。風がキミの背中を押してくれたね。

中等部長賞

炎天下ゴールに放つ決勝弾

中等部1年 ■ 大川 彰煌

選者 上野 亮

ギラギラと太陽の照りつける夏の日、気力体力共に限界に近い状態の中、手に汗にぎる接戦で、終了前にめぐって来た絶好のチャンス。みんなの願いを込めてねらう決勝ゴール。勝負を決めた感動が伝わってくる作品でした。

グランドと部に別れ告ぐ夏の宵

中等部3年 ■ 平野 恵唯

選者 上野 亮

中等部生活最後の大会が終わった帰り道、仲間と共に泣き笑い、いくつもの壁を乗り越え過ごした思い出のつまったグランドでの日々がよみがえり、充実感と共に、戻ることの出来ない日々への一抹の淋しさが伝わってくる作品でした。

高等部長賞

海水浴蒼の世界に迷い込む

高等部1年 ■ 山下 桜英

選者 渡辺 健

楽しい海水浴で、泳いでいるうちに急に水の色が濃く変わったのか、その時に感じたであろう若干の不安と海の深遠さが「蒼」という字でうまく表現されているように思います。

大学長賞

寒暁の肌を突き刺す矢の響き

大学理工学部化学・生命科学科4年 ■ 下平 真之介

選者 阪本 浩

一年で一番寒い時季、夜明け前の弓道場の場面でしょうか。白い息、身体は汗にぬれ、聞こえるのは矢の響きだけ。朝日が差し込む頃には、見事に的を射ていることでしょう。そして、いつの日にかどのような的でも射抜ける人になれますように、と静かに声援を送りたくなります。

優秀賞

やまのぼりまちがみえたよロープウェイ
初等部1年■加藤 ちえみ

サーブするボールの先に入どうぐも
初等部2年■坪井 太槻

クロールのいきつぎであびる水しぶき
初等部3年■亀井 晴

平泳ぎ完泳のすえにじのぼる
初等部5年■外村 実久

シュート決め仲間の声とセミの声
初等部5年■秋山 遙哉

鳴りひびくサーブの音とセミの声
初等部6年■武田 柚季

あと5秒最後のシュート汗を乗せ
中等部1年■杉田 路加

もう一点汗のしみこむユニフォーム
中等部1年■永島 響太

炎天や意地の一勝球に込め
中等部2年■大野 颯馬

食い縛れ夏の日差しもタックルも
中等部3年■細入 魅人

合宿の疲れを飛ばす土用東風
中等部3年■髙橋 亨輔

ラケットを忘れて戻る炎天下
高等部1年■岸本 怜葉

旧友のバックサーブや秋麗
大学文学部日本文学科2年■本多 達郎

人知れず帰路が色付く運動会
大学理工学部化学・生命科学科4年■井上 雅貴

庭球の打球一閃風光る
校友■君塚 仲二

組体操九月の空に立ち上がる
校友■谷口 桂子

春塵やサドルを拭いて草野球
校友■水橋 美加子

総評

今年も青山俳壇に、たくさんの句をお寄せくださり、ありがとうございました。スポーツの体験や観戦・応援から切り取られた一場面がくっきり思い浮かぶ句がたくさんあり、一句一句楽しく拝見しました。初等部生の句「太陽にあたりそうだよホームラン」は光景が目に浮かびますが、「ホームラン」では季語にならないのが残念です。季語は俳句にとって大切なものです。同じく初等部生の句「つきやぶる入道雲をホームラン」は「ホームラン入道雲をつきやぶる」にしないと意味が通じにくいのが惜しいですね。五七五のリズムやすっきりわかりやすい語順も大切です。これらを「調べ」といいます。「この単語で・語順で・テニヲハでいいか」、確認してみましょう。来年もたくさんのご応募をお待ちしています。

林 謙二

選者

片山 由美子
公益社団法人俳人協会副会長。毎日俳壇選者。「香雨」主宰。2013年俳人協会賞受賞。

櫂 未知子
公益社団法人俳人協会理事。同人誌「群青」共同代表。2018年俳人協会賞受賞。

大屋 多詠子
大学文学部日本文学科教授。父は俳人の大屋達治。俳句結社「天為」所属。俳人協会会員。

林 謙二
中等部国語科教諭。俳人協会教職員のための俳句指導講座委員。俳句結社「一葦」所属。

「放課後819倶楽部」
「青山俳壇」と連動して高・中等部生と俳句を学ぶシリーズ。ぜひご覧ください。